

大阪珠算協会の成り立ち

一般社団法人大阪珠算協会 副会長 西川善彰

道具としてのそろばんの発達には諸説あるが、そのスタートは、紀元前約3千年、メソポタミア地方で、線を引き石を並べて計算したというのが有力な説らしい。

12世紀に中国そろばんの原型である「五玉二つ・一玉五つ」のそろばんができた。当時の中国庶民の暮らしを描いた絵の中に薬屋があり、「そろばん」で計算しているところが描写されている。

日本でそろばんが使用されたのは16世紀末期で、その頃のそろばんが現存している。鉄砲伝来のような限定した日は決められないが、明との貿易を考えたとき、16世紀より、もう少しさかのぼると推測するがその証拠はない。

日本のそろばんの歴史は、日本独自で発達した和算の歴史と共にある。現存最古の和算書は、1622年に発行された毛利重能（もうりしげよし）の『割算書』である。毛利重能は、京都に「天下一割算指南所」という教室をこしらえ、多くの門弟を指導したと伝えられている。その門下の吉田光由は江戸時代の一大ベストセラー『塵劫記』の原作者である。『塵劫記』は多くの人の手で何度も改定され、明治初めまで発行されたそうである。

元禄時代、大坂は天下の台所といわれていた。そろばんのことを「降るあられのように音を立てて計算されている様相」と井原西鶴は『日本永代蔵』で述べている。当時、和算の計算の手段として欠くべからざる道具であったそろばんは、土木、天文、測量、暦などの分野において、大きな存在感を示していた。

また、この時期、専門的に和算を勉強するのにいくつもの流派が生まれた。17世紀に活躍した世界的数学者、関孝和の「関流」もその一つである。18世紀には、大坂で多くの和算家を育てた麻田剛立がいた。彼は日食を正確に計算して割り出したが、西洋において計算で日食が割り出されたのは麻田の150年後である。その功績から月のクレーターの一つは「ASADA」と命名されている。その麻田より5代後が岸本貫泉校の岸本増弘である。

また、日本各地を旅して和算を教える遊歴算家の存在も、江戸時代の数学の発展に寄与した。世界に誇るべき算額などに、江戸時代の独特の数学文化の発達が読み取れる。

江戸時代の庶民の子供たちは寺子屋で、読み書きと共にそろばんで四則計算や鶴亀算、植木算などを学び、数学的素地を育てていったのである。

明治になって、義務教育が制度化され、学校での数学は和算から洋算にとって代わられた。寺子屋も、義務教育制度が調っていくにつれて廃れたが、実社会では、洋算（筆算）では計算が追いつかず、依然としてそろばんが主流であったことから、そろばんは

習う人向けに、そろばん教室が現れたのも必然だと言えよう。

明治初めに、浪花岸本流貫泉校という大阪珠算界の源流ともいべきそろばん教室ができた。この教室は、和算から珠算を専門に独立させた教室で、この教室で学んだ人たちが独立し、いろいろの会派ができていった。

また、伊勢地方では、江戸時代後期、算術家一色正芳の百日稽古（伊勢百日算の元？）が生まれ、地域の寺子屋に組み込まれた。百日というのは農閑期3月1日から6月8日までの百日である。江戸で活躍した伊勢商人のそろばん達者の理由がここにある。明治に入ってその正芳流を発展させたのが井上親亮の伊勢百日算共興学舎で、早朝6時から夜10時まで百日間練習したそうである。

この学舎で育った多くの門弟が、日本国中に珠算の先生として活躍の場を求めていった。大阪も例外ではなく、伊勢を源流に持つ会派がいくつもできている。

このように、種々の会派が群雄割拠し始めたのが明治の終わりごろで、塾生は塾内で競算日があり競争していた。また他塾との合同練習を通じて試合の萌芽があったことが推察される。

種々の会派から、同好の志が一堂に会して競う競技会は大正時代からである。貯金局の大会や実業補習学校主催の競技会、各会派による合同の競技会が各地で開催されるようになり、昭和に入ると、公立商業学校でも私立商業学校でも連盟を結成して競い合った。学校の名誉をかけるので各校の珠算部の練習はスパルタであった。塾の方が学校の練習に引っ張られたようである。

当時、各会派でレベルの基準を設けていたが、基準も呼び名もバラバラであった。珠算技術の客観的な評価を望む声が起こりつつあったが、昭和6年2月15日、東京商工会議所主催第1回珠算能力検定試験が行われ、午後には競技会が開催された。東京に遅れること9年、大阪で昭和15年9月15日、大阪商工会議所主催第1回珠算能力検定試験が開催され、日本の東西で検定試験が始まったのである。

この頃、大阪では検定試験とともに団体編成の気運の高まりを見せている。昭和15年10月30日お互いに敵視していた8団体の塾が大同団結して大阪珠算報国会を結成した。この時には、全大阪珠算協会の設立準備がされていたようで、11月には、「報国会会員はすべて全大阪珠算協会に加盟するもの」となっている。

大阪商工会議所と協力の下、昭和15年12月24日、中等学校代表9名、青年学校1名、小学校2名、報国会5名と大阪商工会議所が発起人となり全大阪珠算協会が創立された。塾、学校がそれぞれの領域で振興に尽くしてきたが、ここに一本化が出来たのである。昭和16年2月9日に大阪珠算報国会の結成式が挙行された。また、昭和16年2月26日に全大阪珠算協会の発会式が挙行された。

報国会に加盟する先生方は、昭和18年4月の総会の後、歌舞伎卯月興行五郎劇を観劇してつかの間の余暇を楽しまれた記録が残っているが、そんな時間は長続きせず、昭和19年夏ごろより始まる学童疎開や、戦況悪化とともに活動が滞った。先生方も多く

が戦地に赴いたり、会社へ徴用されている。

塾は塾条例(講習会規定)で規制を受け大変であった。当時の先生方の回想録を読むと、落ち着いてそろばんができる環境ではなかった。珠算教育の屋台骨が根底から音を立てて崩れんばかりの様相だったことをうかがい知ることができる。

しかし、このような困難な状況まっただ中の昭和19年10月15日、大阪商工経済会主催全国統一第1回1・2・3級珠算能力検定試験が実施された。東京では3級が10月1日、1・2級が10月8日に実施されている。一カ所で印刷用紙が入手困難なため、各ブロック代表の商工経済会に問題だけを送り、ブロックごとに印刷したそうである。伝票算は臨時に試験種目から除外して施行されている。珠算技術向上の必要性からとはいえ、大変な時代に今の能力検定が船出した。今に生きる我々が直面する課題とは、種類も規模も全く異なる難題を抱えての出航である。

昭和20年8月15日、終戦。昭和20年9月上旬から10月上旬に第2回全国統一検定が行われる予定になっていた。物資不足の中での実施は、東京で11月25日、大阪は12月25日に実施された。

戦地に散った多くの先輩方や、戦災で命を失った子どもたちの思いを胸に、会員が徐々に珠算教育に復帰するようになった。昭和21年会員が本格的に復帰をはじめ、報国会は自然消滅し、全大阪珠算協会にまとまっていった。

こうして……………。

昭和22年6月22日、大阪珠算協会会則制定。ここに全大阪珠算協会改め、「大阪珠算協会」が誕生することとなった。昭和31年11月26日大阪府教育委員会より社団法人の認可を受け、この日を創立記念日としている。